文部科学省令和8年度日本語教師養成・研修推進拠点整備事業
北海道・東北ブロック日本語教師養成実施機関連絡協議会

日本語教育を学ぶ学生のためのHoT-JeT合宿2026

私たちが見た日本語教育の現場と魅力～札幌青葉鍼灸柔整専門学校日本語学科～

2026年9月7日～8日、北海道・東北地域の大学で日本語教育を学ぶ大学生が札幌に集まり、合宿を行いました。合宿では、札幌市内にある日本語学校2校を訪問させていただきました。学校や授業の様子を見学し、講師の方々に直接お話を伺うことで、日本語教育の実際の現場とその魅力を学ぶ貴重な機会となりました。本記事では、その体験を学生の視点からご紹介します。

学校の概要・特色

学校法人札幌青葉学園　札幌青葉鍼灸柔整専門学校　日本語学科 https://www.aoba-jl.jp/



私たちが訪問した札幌青葉鍼灸柔整専門学校日本語学科では、2026年9月現在、51名の学生が日本語を学んでいます。学生たちの国籍は、ミャンマーとネパールが多く、他にバングラディシュ、オーストラリアなどと多様です。クラスは3つに分けられており、あじさい、コスモス、ルピナスと名付けられています。当該学科を説明してくださった先生によると、クラス名を付ける際には、学生自身が所属するクラスのレベルがわからないように配慮しているといいます。

学生に対する学習のサポートとして、日本語学習教材の貸し出しが行われています。職員室には、多くの日本語学習書が並べられており、学生たちは先生に声をかけ、必要事項を記入することで借りることができます。生活面での支援は、医療機関や市役所への付き添いが挙げられます。今回インタビューさせていただいたK先生は、医療機関や市役所で使われる専門用語を理解できない学生も多いとおっしゃっていました。そのため、学生からサポートの要請があれば付き添い、医療機関での問診票の記入サポートや市役所関係の書類に関するサポートを行なっているそうです。

また当該学科は、鍼灸・柔道整復の専門学校に設置されているため、年に一度の学祭では鍼灸・柔道整復学科の学生と日本語学科の学生が交流できます。寮が用意されているため、ゴミの捨て方など、日本での生活に必要なことを知る機会も提供されています。

授業見学



今回見学したのは基礎定着クラスで、読解の授業と文法の授業を見学しました。教材には『1日10分　初級からはじめる読解120』(アスク出版、2020年)のDAY98と『できる日本語初中級　私の文法ノート』(アルク、2013年)の15課を使用していました。読解の時間ではメール文についての学習を行っていました。メール文問題を読解する時に着目するべき事項を丁寧に解説しながら授業を進めているのが印象的でした。授業内で使用している言語は日本語でしたが、解き方のポイントが書かれているプリントには各種言語が使用されており、いつでも見返してすぐに理解できるような工夫が施されているように感じました。

教室内の雰囲気は和気藹々としている印象でした。学生が音読をする中で上手く発音できない箇所や読めない箇所があった際には、席の距離に関係なく、他の学生が読み方を伝えることでサポートをしていたことが印象に残っています。また、教師の質問に対して、学生が積極的に返答している様子も伺えました。

さらに、教師が行うサポートも充実していました。学生が個人で問題を解いている時には、教室を巡回してわからない学生に対してアドバイスを行っていました。また、難しい文章を図解することで学生が理解しやすくなるように工夫が施されていました。

全体を通して、教師の学生を思った創意工夫と学生の積極的な授業参加姿勢を感じることができました。

講師インタビュー

今回の合宿では、事務と日本語教師を兼業しているK先生と、ベテラン日本語教師のA先生にインタビューを行い、お二人の職業観を伺いました。その回答をQ＆A方式で、インタビュアーのコメントを加えてご紹介します。

Q1. 日本語教師のやりがいや魅力を教えてください。

K先生「日本語や日本での生活面での成長を間近で見られることです。来日した際に母語で話しかけようとしてコミュニケーションをとれなかった学生が、卒業するころには日本語だけでコミュニケーションをとれるようになり、日本語で感謝の言葉を伝えてくれたことが、今でも心に残っています。」

A先生「学生の成長を感じられることです。N4合格レベルに達していなかった学生を1年間担当し、1年後の試験でN3に合格したときはとても嬉しかったです。」

お二人とも共通して「成長を見られること」を挙げてくださいました。日々のコミュニケーションを通して学生の成長を感じられることは、日本語を教えるうえで大きなモチベーションになるのだと感じました。

Q2. 日本語教師として、日常や授業で何に気を付けていますか。

K先生「簡単で、わかりやすい日本語を使うようにしています。」

A先生「インプットとアウトプットの割合を5:5にするようにしています。」

K先生は、日常的に気を付けていることを教えてくださいました。K先生によると、進学やビザに関するやりとりなど、複雑な情報を理解することが必要な場面で、日本語母語話者にとっても難しく、理解しにくい日本語が使われていることがある、とのことでした。それを聞き、日本語教師はもちろん、日本語教師以外の人も非日本語母語話者に伝わる日本語を意識することはとても大切なことであると思いました。

Q3. 学生との距離感で気を付けていることは何ですか。

K先生「学生は家族や友人と離れて一人で日本に来ているので、授業だけでなく、相談ができる相手になりたいと思っています。ですが、近づきすぎないように気を付けています。」

A先生「学生といえど全員が19歳以上の大人なので、距離を保ち、大人として接するように心がけています。」

K先生は事務と兼業しているため、学生にとって相談しやすい身近な存在であることを意識しているように感じました。一方、A先生は教師として適切な距離を保って学生と接することを大切にされているように感じました。

訪問の感想

今回の講師インタビューで、どちらの先生も「この学校で働き続けたい」と話されていたことが印象に残りました。実際に先生方や学生が明るく親切で、家族のような温かい雰囲気がありました。それから、学生が教室を綺麗にしている様子も見られ、全員が学校を大切にしていることも伝わってきました。こういった日本語学校の温かい雰囲気や働き方を知ることができ、これからの大学での学習のモチベーションに繋がりました。これからはより一層力を入れて良い学習環境を作れる日本語教師になれるよう、学習していこうと思います。

S.M.(北海道教育大学函館校)

今回の訪問を通して、日本語教育について視野が広がったと感じています。授業中に拝見した、一生懸命日本語を学んでいる学生さんたちの姿は、とても素晴らしいと感じました。また、先生方が学生の学習面と生活面のサポートも行なっていることから、学生と先生間の信頼関係が深いという印象を受けました。今回の合宿で得た知識を生かし、日本語学習者を支える人材になることを目指し、学びを深めていきたいです。

T.M.(北海学園大学)

今回の学校見学で、学生さんと交流していたときに「学校は楽しい。」と話していたことが印象に残っています。学生が楽しいと感じる環境を作るのは非常に困難なことだと思いますが、授業をわかりやすくするために行われているさまざまな工夫や学校生活と日本の生活をサポートする取り組みが豊富なため、楽しさを感じることができるのだと実感しました。また、学生が積極的に授業を受けている姿からも学校生活を楽しんでいることが伝わってきました。今回の合宿で経験したことを大切にしながら、日本語教師になるための学習を続けていきたいと思います。

W.R.(札幌大学)